

佐賀県における麦作の 現況と技術対策

佐賀県農業専門技術員室
主任 専 技

河内 塾 一 之

まえがき

麦作振興運動と農家の意欲により、水田麦作は定着し今後も増加の傾向にある。

平担部水田は稲と麦の作付体系であり、稲の機械や共同乾燥施設が、麦作に、そのまま利用出来る利点がありメリットの高い麦作が出来る。

麦作共励会に出品審査された、代表的な技術体系を紹介する。

I 麦作の現況

1. 栽培面積の推移

佐賀県の麦作面積は、昭和48年は7,600 ha まで減少したが、その後は次第に増加し、50年は14,000 ha、54年産は20,200 ha と増加している。54年度の内訳は小麦が4,300 ha、二条大麦15,800 ha、裸麦134 haで、栽培の中心はビール大麦である。

1 農家当たり作付規模は昭和47年64 a が、51年は88 a に増加し、さらに拡大しているが、農家戸数は増加していない。

麦作共励会の出品者で、最も作付規模の大きい農家は13.6 ha、県審査37名中に6 ha 以上が8名、5 ha 以上が12名である。小麦は5ha 以上が6名で、出品者の作付面積平均は大麥の部で、5.1 ha、小麦で3.1 haである。

この栽培面積の中に、期間借地面積は大麥の部で2.8 ha、小麦の部は1.9haと、自己の水田面積より多く借地されている。

県の54年度の播付けの目標は小麦7,000 ha、二条大麦14,800 ha、裸麦200 haの計22,000 ha を計画し、今後は小麦を中心にして拡大する。

2. 10 a 当り収量

昭和53～54年度は豊作であり、小麦337 kg、二条大麦348kg、裸麦385kgで作況指数は138～124%を示している。過去の成績は、4ヶ年に1回は200 kg以下の収量で、300kg以上の反収は7ヶ年に1回の出現率であった。

麦作共励会の平均収量は、二条大麦が415 kg、小麦は395 kg で、県平均収量より19～17%多い。

さらに、ビール大麦共進会では、1～2等の合格麦を1 農家で250以上を出荷された農家数は、194名の多きに達している。

また、品質は昭和51～52年はビール大麦で2等が5%規格外が95%を示していたが、本年は品質がよく、合格率は、ビール大麦(1～2等のみ)は95.8%、大粒大麦80%、小麦は92.4%とすぐれている。

3. 共乾施設による麦処理状況

昭和54年中までに建設されるものを含めると、施設数は108ヶ所あるが、53年度までの共乾施設の関係面積は18,000 haで、この中で、麦類を播きつけられた水田は7,723 ha、全体の43%となり、今後、施設の有効利用をはかるため、さらに麦作面積を拡大する必要がある。

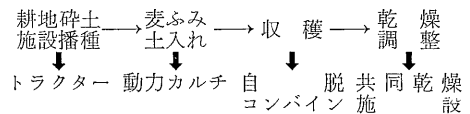
共乾施設で乾燥調整されたものは、品質や発芽歩合ともすぐれ好評である。

II 麦作優秀農家の紹介・古賀政一氏

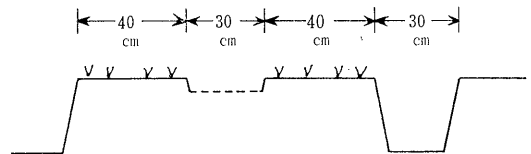
山麓部の小城町で水稻を基幹として小麦6 ha、二条大麦4 ha合計10 ha、みかん2.7 ha、施設花き2310㎡を、親子3人で複合経営する専業農家で、農業機械利用組合長として活躍されている。各作物間の競合を少なくするため、機械化一貫体系が確立され、さらに共同乾燥施設を有効に利用して省力化がはかられている。

本県は二条大麦の栽培が多いが、小麦を軸とし、2つの組合せで、収穫期の作業の競合が軽減されている。また規模拡大のため、自家水田1.8 ha、期間借地8.2 haが耕作されている。

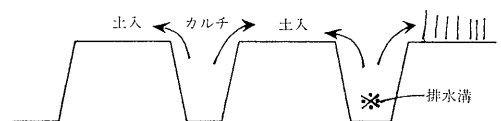
※ 技術の特色は



第1図 播種 当時



収穫 時



施肥播種機をトラクターにセットして、一行程で、11月中旬から12月上旬までに適期播種されている。畦巾は150cmの二条広巾播で、播巾率は60%で、薄播きが励行されている。

生育中期に小畦タイプになるよう、土入れが2〜3回は実施され、麦の生育調節と倒伏防止並びに、降雨後の早期排水がはかられている。

品質改善は、種子更新と種子消毒の励行や、麦踏み、土入れによる倒伏防止、トップジンM剤の散布によって赤カビ病が防除されている。収穫はコンバイン刈りであるが、麦粒に傷がつかぬよう水分含有率を測定し、23〜25%に低下した時に、適正回転数で脱穀されている。

第1表 手入回数と収量

回数 項目	1回	2	3	4	5	6
麦ふみ	387kg	364	448	468	429	473
土入	346kg	376	470			

※ 麦作共励会小麦の部

収量は昭和53年は360kg/10a、54年はビール大麦4haの平均で292kg、小麦は6haの平均で367kgであり、県平均収量の150%の指数となる。

品質は小麦、ビール大麦とも全部が1等に格付けされている。特にみかん、施設園芸の複合経営でありながら10haを作付けされたことは、大変な努力であり、地域における麦作振興の先導的役割を十分に果たされている。

III 多収のために

1. 乾田化対策と土づくり

暖地麦作は雨、湿害を如何にして回避するかにかゝっており、有機、弾丸暗渠の施工と、麦の生育に適した土づくりを行なうため生わら、石灰類を十分に施用する。

2. 適期播きと薄播きの励行

11月下旬を中心として、平均気温8〜10℃の適期に薄播きを行ない、播巾率の向上によって、穂数は小麦平方メートル当り400本、二条大麦は500本を目安として過剰分けつを抑え、茎の充実をはかる。また、1穂当り収量が小さいので、小麦1g、ビール大麦は0.75gは確保すべきである。

3. 手入れ

麦の生育に応じ麦踏み、

土入れを行ない、穂数確保と茎の充実をはかる。高温多湿時は赤カビ病が多発するので、トップジンM剤を開花期と乳熟期の2回散布する。手入れを徹底し災害の被害率を5%以下に抑える。

あとがき

麦類は乾田化をはかり、適期に薄播きを行ない、十分な手入れによって、穂数と1穂収量を確保する。また10a当りの所得が少ない

ので、土壌、経営面積に適合した機械化体系を確立し、期間借地により4〜6haまで拡大出来れば、メリットの高い麦づくりとなろう。

第2表 栽培面積と収量

種類 栽培面積	10a当り収量	
	小麦	二条大麦
1.1〜2.0ha	357kg	411kg
2.1〜3.0	434	332
3.1〜4.1	414	381
4.1〜5.0	472	337
5.1〜6.0	350	447
6.1〜8.0	367	356
8.1以上	—	307

第3表 穂数と収量

m ² 当り 穂数	10a当り収量		
	穂当り 0.7g	穂当り 0.9g	穂当り 1.1g
300本	210K	270K	330K
400	280	360	440
500	350	450	550
600	420	540	660

専技室

第4表 暗渠方法と麦の収量 (佐賀県農試)

項目 暗渠方法	稈長 cm	穂長 本	m ² 当り 穂数本	1穂 全粒数	m ² 当り 全粒数	10a当り 収量	全比率	上麦 千粒重
無暗渠	49.6	3.6	185	12.5	23,100	66kg	100.0%	34.1g
有材暗渠 {コルゲート 稈ガラ	58.3	4.6	243	18.6	45,300	143	217	38.1
有材暗渠+ 稈穀暗渠	74.4	5.4	382	20.7	79,300	268	406	40.6

第5表 年次と収量構成要素

項目 種類	小麦					
	小			二条大麦		
	年次 平均	低収年次 50〜52 平均	多収年次 53〜54 平均	年次 平均	低収年次 50〜52 平均	多収年次 53〜54 平均
播種期	12月1日	12.2	11.28	11.31	12.4	11.23
出穂期	4月24日	4.24	4.19	4.16	4.17	4.9
m ² 当り有効穂数	338本	298	384	449	389	549
m ² 当り全小穂(粒)数	508	450	599	1083	917	1457
一穂当り収量	0.84	0.75	1.07	0.69	0.66	0.72
10a当り収量	283	225	410	310	252	395